

初年次教育の今後を想う

成田秀夫

大正大学

この度、『初年次教育学会誌』第12巻第1号を刊行する運びになりました。学会誌発行にあたっては、編集委員会の皆さまにはたいへんご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

さて、年号も令和に改まり、新しい時代の始まりが予感されますが、わが国の高等教育を巡る情勢を振り返りますと、前途多難といわざるをえません。高等教育予算の削減、大学の統廃合、さらには高大接続改革の目玉であった英語の外部試験、及び数学・国語の記述式試験導入が見送られるなど、先行きの不透明さが際立っているように思われます。

その一方、初年次教育に目を向けると、もやは「初年次教育」という必要もないほど日本の高等教育に確実に根付いているように思われます。2019年に開催された第12回大会の大会校・課題研究委員会合同企画シンポジウムのタイトルが「初年次を超える初年次教育～キャリア形成支援の視点から～」とあるように、初年次教育は初年次にとどまらず、関係する諸領域と有機的に結合しながら発展し、もはや学士課程全体の教育と不可分になっています。

しかし、見方を変えると、こうした発展は「初年次教育は、今後も初年次教育足りうるか」という問いを引き寄せているともいえます。もちろん、本学会の設立趣意にあるように「初年次教育の理論、教育内容、教育方法、評価法といった初年次教育に直結する内容はもとより、青年期の適応、高校から大学への移行、専門教育との接続といった『移行』に関する研究、キャリア教育、サービ斯拉ーニング等の初年次教育と隣接する教育プログラムも対象」としていくとあるように、当初よりそうした広がりも想定されていました。しかし、初年次教育から隣接する領域をとらえる場合と、学士課程全体から初年次教育を捉える場合では、おのずから見える景色が違ってきます。別の言い方をすれば、もはやディプロマ・ポリシーとの連関を考えない初年次教育はありえないということです。さらに、社会との接続まで考慮に入れれば、初年次教育の課題が専門教育との接続だけでなく、ことも明らかでしょう。こうしてみると、初年次教育が初年次教育をおもな対象としていた時代は終わりつつあるのではないのでしょうか。

鑑みれば、2018年には、学会創立10周年を記念して『進化する初年次教育』が発刊されました。そこでは、本学会10年の歩みと成果が示されていると同時に、これからの課題も明らかにされています。個々の会員はもとより、所属する機関の真摯な取り組みが期待されています。本学会が次の10年に向けて飛躍できるよう、会員の皆さまから研究論文、ならびに事例研究論文が多数寄せられることを祈念いたします。

(初年次教育学会理事)